The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メタフュシカ 第41号 彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2010, 41, p. 101-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12596
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【彙報】

○　哲学哲学史・現代思想文化学

現在、学部の哲学・思想文化学専修には 24 名が在籍しています。大学院の哲学哲学史博士前期課程には 6 名、同後期課程には 7 名が、大学院の現代思想文化学博士前期課程には 4 名、同後期課程には 3 名が在籍しています。上野修教授、入江幸男教授、舟場保之准教授、および須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授、入谷秀一助教の各教員が、臨床哲学所属の教員と連携しつつ、学生の教育・研究指導にあたっています。

本年度の講義・演習は、「ラカンを読む」「ホッブズとスピノザ－二つの政治哲学」「スピノザ『エチカ』を読むⅦ, Ⅷ」「ドゥルーズのライプニッツ論を読む」「人格の同一性とその転覆」（上野教授）、「Discussing Quine's *Word and Object*」「論理学入門(1), (2)」「言語を理解するとはどういうことか」（入江教授）、「カント『純粋理性批判』を読むⅦ, Ⅷ」「カント実践哲学の諸問題Ⅱ」「ドイツ哲学基本文献講読Ⅰ, Ⅱ」「J. ハーバーマスの思想Ⅳ」（舟場准教授）、「ショーペンハウアーの思想(1), (2)」「ニーチェの歴史思想(6), (7)」「現代哲学史概説」（須藤教授）、「オルターグローバリゼーションの思想」「現代哲学基本文献講読（フランス語）：アナーキズム研究」（望月教授）、「先端科学技術と社会」「科学技術社会論入門」「科学技術と市民」（中村准教授）、「Writing Humanities Paper in English Ⅰ, Ⅱ」（望月教授・中村准教授）という題目で行われています。また、その他に、修士論文・博士論文作成のための演習が定期的に行われ、活発な研究・討論が行われています。

また非常勤講師としては、山口信夫教授（岡山大学）に「デカルト思想史の展望」、戸田山和久教授（名古屋大学）に「現代科学哲学入門――実在論論争を中心に」という題目で講義していただいています。

HP（http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy）ならびに You Tube にウェブ局「ヴィデオ・メタフュシカ」を開設し、研究室の活動状況などを公開しています。また海外に研究成果を発信するために、欧文機関紙 *Philosophia OSAKA* を刊行しています。

哲学哲学史・現代思想文化学の研究会として、handai metaphysica を開催しています。特別講演会としては、2010 年 3 月 2 日に ヴォルフガング･クールマン博士（アーヘン工科大学）に「超越論的語用論の擁護―超越論的語用論とは何か―」という題目で、同年 10 月 1 日にエバーハルト・オルトラント博士（ヒルデスハイム大学）に「「生の技法」とはどのような技法か？」という題目で、同年 12 月 10 日に戸田山和久教授（名古屋大学）に「志向性の自然化をどのように進めるか」という題目で講演していただきました。また、研究例会としては、同年 3 月 15 日に竹内綱史講師（龍谷大学）に「アポロンとソクラテス――『悲劇の誕生』の歴史哲学再考――」（『メタフュシカ』第 40 号掲載）、重田謙助教に「知識の懐疑論――ウィトゲンシュタインとデカルトの対立――」という題目で、同年 8 月 12 日に山口信夫教授（岡山大学）に「パリと思想家たち――エラスムスの場合」という題目で講演していただきました。いずれにおいても活発な質疑応答がなされました。

上野教授が共著者となっている『〈私の哲学〉を哲学する』（講談社）が 2010 年 10 月に刊行されました。また月刊雑誌『本』（講談社）7 月号より、「様相の十七世紀―哲学史のワンダーランド」の連載を開始しています。

上野教授が日本ラカン協会第 10 回ワークショップ（2010 年 10 月 31 日、専修大学）にて「真理と主体―デイヴィドソンの根元的解釈とラカン」という題目で、また西日本哲学会第 61 回大会シンポジウム（2010 年 12 月 5 日、鹿児島大学）にて「決定論の彼方、自由としての必然―スピノザの場合」という題目で発表を行いました。

入江教授が Internationale Tagung “Würde und Werte”（2010 年 9 月 14 日、南山大学）にて “Was ist eine moralische Frage? − Ein „dichtes“ moralisches Wort und die Würde des Menschen − “ という題目で、また The secondmeeting of IMITATIO（同年 12 月 18 日、ICU）にて “How Is It Possible to Imitate Unconsciously a Desire of Another Person?“ という題目で発表を行いました。また論考「内在的基礎づけ主義とドイツ観念論」が『ヘーゲル研究』（16 号、2010 年）に掲載されました。

須藤教授が西田哲学会第 8 年次大会（2010 年 7 月 25 日、明治大学）のシンポジウム「身体」にて、「芸術と道徳としての身体」という題目で講演を行いました。

中村准教授が第 1 回日韓若手 STS 研究者ワークショップ（2010 年 3 月 19 日～ 20 日、ソウル大学）にて “Comparative approach to scientific misconduct: Scientific community, governmental body and the public”, “Adaptation of science communication to Asian culture?: Development of science cafe movement in Japan” という題目で発表を行いました。

入谷助教が日本倫理学会第 61 回大会（2010 年 10 月 9 日、慶應義塾大学）にて「アドルノの知識人論――「風景」をキー・ワードとして」という題目で発表を行いました。

中野彰則氏が「スピノザにおける「神の存在証明」−『エチカ』第一部定理 11 について − 」という題目で、田中潤一氏（札幌大谷大学講師）が「西田哲学における知識論の研究 − 知識の客観性と生成のプロセスを中心に − 」という題目で、それぞれ 2010 年 9 月に博士号を取得しました。

山口裕人院生がシンポジウム〈ライプニッツと現代―『弁神論』300 年〉（日仏哲学会・日本ライプニッツ協会共催、2010 年 3 月 27 日、京都大学）にて「仮定的必然、そして世界について」という題目で発表を行いました。

嘉目道人院生が実存思想協会・ドイツ観念論研究会共催第 19 回シンポジウム（2010 年 10 月 3 日、同志社大学）にて「カントかフィヒテか―超越論的語用論の源流を巡って―」という題目で、また日本フィヒテ協会第 26 回大会（2010 年 11 月 20 日、長崎総合科学大学）にて「事行としての自己関係性―フィヒテ知識学の言語哲学的変換に向けて―」という題目で発表を行いました。

映画「哲学への権利――国際哲学コレージュの軌跡」の上映・討論会が 2010 年 2 月 7 日に開催されました。また世界哲学の日を記念し、同年 11 月 18 日に「哲学的お題」と銘打ち、トークセミナーが開催されました。

第一回哲学ワークショップ（テーマ「規範と価値の対立をめぐる論争」）が 2010 年 4 月 16 日に、第二回哲学ワークショップ（テーマ「J. バトラーと哲学」「倫理と人権」、他）が同年 9 月 17 ～ 19 日に開催されました。

（入谷）

○　臨床哲学

本年度の当研究室の在籍者は、学部生が 29 名、大学院生が 16 名（前期課程 7 名、後期課程 9 名）である。中岡成文教授、浜渦辰二教授、本間直樹准教授（兼任）、大北全俊助教（本年度より着任）の各教員スタッフが、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に従事

している。

本年度は非常勤講師として、小林傳司教授（大阪大学コミュニケーションデザイン･センター）に科学技術論、家高洋招へい研究員（大阪大学大学院文学研究科）にE. レヴィナスのテキスト読解の演習、久保田徹特任准教授（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）に本間直樹准教授と共同で映像メディア論を担当していただいた。

2010年2月にGCOE国際シンポジウム「コンフリクトを軽減する対話と実践――人文治療学の挑戦」Global COE Program International Symposium: “Dialogue and Practice Reducing Conflicts: Challenge of Humanities Therapy” を大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学」主催，大阪大学大学院文学研究科・臨床哲学研究室共催によって、韓国・江原大学から李光來教授、金善姫教授、李基原講師の3名を招へいし開催した（場所は大阪大学豊中キャンパス待兼山会館）。

浜渦辰二教授が代表をしている「ケアの臨床哲学」研究会が主催するシンポジウムが2010年4月（シンポジウム「高齢社会における終末期医療を考える」）と2010年8月（シンポジウム「高齢社会におけるホスピスを考える」）、2011年1月（シンポジウム「高齢社会における施設での看取りを考える」）に開催された（場所はいずれも大阪大学中之島センター）。

2010年6月に『臨床哲学』第一一号を発行した。初めてweb上でのみの刊行とした。上記のGCOE国際シンポジウム「コンフリクトを軽減する対話と実践――人文治療学の挑戦」Global COE Program International Symposium: “Dialogue and Practice Reducing Conflicts: Challenge of Humanities Therapy” での報告を特集とし、活動報告二編、研究ノート、ワーキングペーパー、翻訳を各一編所収している。

2010年9月にこれまでの臨床哲学の歩みをまとめた『ドキュメント　臨床哲学』（鷲田清一監修、本間直樹･中岡成文編）が大阪大学出版会より刊行された。当研究室の教員である中岡成文教授、浜渦辰二教授、本間直樹准教授をはじめ、小林傳司教授（大阪大学コミュニケーションデザイン･センター）、紀平知樹講師（兵庫医療大学）、家高洋招聘研究員（大阪大学大学院文学研究科）らが執筆した。臨床哲学研究室がこれまで刊行した紀要の文章や研究会、授業などを想起し、臨床哲学の活動に関わった人たちの思索を振り返るかたちでまとめた。

2010年11月、助教の大北全俊が日本生命倫理学会より若手論文奨励賞を受賞した。

2009年12月、博士課程後期に在席していた樫本直樹が「自己陶冶と公的討論――J. S. ミルの市民社会論の射程――」で博士（文学）の学位を取得した。

本年度の講義・演習は以下の通りである。

「臨床哲学ネットワーキング10前・後」、「倫理学の研究方法C・D」、「臨床哲学概論10」（以上、中岡、浜渦、本間、大北）、「臨床哲学研究」（中岡、浜渦、本間）、「自己変容の哲学10前･後」「Ethics in English 2010」「ヘーゲル哲学を読みぬく10前・後」（以上、中岡）、「ケアの人間学―人間の老いとそのケア―」、「フッサール生活世界論のゆくえ」、「老いとケアを考える」、「フッサール生活世界論（外国語文献演習）」（以下、浜渦）、「思考の活動とメディア(4)・(5)」（本間、久保田）「イメージ論を読む(3)・(4)」、「哲学的コミュニケーションの探究と実践(7)・(8)」（以上、本間）、「レヴィナスを読む」（家高）、「知識人と哲学者の役割について」（小林）。

（大北）